

短 報

短期間に入退院を繰り返す患者への退院支援の取り組み
—「家っていいな」に寄り添って—

白木 誠司, 中村 小百合, 松枝 美穂子, 中村 美代子, 小野寺 健治

八戸赤十字病院 5C 病棟

Key words : 地域生活, 退院前訪問指導, リカバリ

I. 目 的

患者は、就労支援・デイケア・訪問看護のサービスを受けているが、1 年間に 3 回の入退院を繰り返すため、総合病院精神科から退院前訪問指導を行い、患者と家族の希望、思いを面接により整理し、地域の中で生活の維持ができるようにすることを目的とする。

II. 方 法

1. 研究期間：X 年 Y 月～X 年 Y 月 + 40 日
2. 研究デザイン：事例研究
3. 研究対象：A 氏, 40 歳代, 女性, 統合失調症, 同じ敷地内に A 氏宅と妹宅がある
4. データ収集方法
 - 1) 退院前訪問指導での、A 氏と妹との面接内容
 - 2) A 氏の希望、思いを自由記載する
 - 3) 記載内容をカテゴリー分けする
 - 4) ケア会議にて、サービス内容の変更と確認をする
 - 5) 3), 4) の内容を自宅に貼る

III. 倫理的配慮

本研究は、八戸赤十字病院倫理審査会の承認を受け、患者、家族には研究目的、匿名性の確保、研究結果の公表を行うこと、参加の拒否が

可能で一切の不利益を生じないことを口頭、書面にて説明し、同意を得た。

IV. 結 果

前回、自傷行為をして入院しているため、今回、妹から A 氏が退院して帰宅することに対する不安の言葉が聞かれた。A 氏は、自宅退院への自信を失い施設入所を考えていた。このため、A 氏と妹と共に何が自宅への退院を困難にしているのかを確認するため、退院前訪問指導を行った。妹は、A 氏の病気の経過について、希望、思いを交えて涙を浮かべながら話した。その後、「どのようにすれば、入退院を繰り返さず、家で生活ができるようになるのか」と話した。それを聞いて、A 氏からは、「やっぱり家っていいな」という言葉が聞かれた。

このため、A 氏と妹の希望、思いを整理するために、できていること（強み）と心配なこと（弱み）を自由に記載してもらった。更に記載した内容をカテゴリー分けし、対処方法を考えた。カテゴリー分けした内容、対処方法は、A 氏の言葉で記載し、模造紙に貼り、看護師と一緒に整理した。特に主治医から言われた「自殺なんて、人生を丸投げするなんて、言語道断、許しませんよ」という言葉を思い出すことは、ふっと浮かんでくる不安への対処方法として活

用できると話した。

ケア会議を行い、現在、受けているサービスの変更について相談した。これまでの就労支援では、黙々と、休憩もとらずに無理をしていた、と話するため、その対処方法を一緒に考えた。A氏からは、「なんだ、症状が出た時は、休憩して、頓用薬を飲んでいいんだ。調子が悪いて言っていないんだね」と、不調時の対処方法も考えることができた。そして、「料理のレパートリーを増やして、姪っ子に美味しい料理を作ってあげたい」と、前向きに考えられるようになり、A氏から希望してヘルパーを導入した。

V. 考 察

訪問看護の目的を、玉置は、「生活の主体である精神障害をもつその人自身とその人がその人らしく生きることをともに考え、安心して地域で生活できるよう自己決定を支援しサポートすること」である¹⁾と述べている。退院前訪

問指導においてA氏と妹の希望、思いについて、できていること（強み）を認め、心配なこと（弱み）についての対策を考えることは、自己決定を支援することになった。

マーク・レーガンらは、「リカバリー概念は、単なる社会復帰や社会参加を目指すのではなく、病気や健康状態の如何にかかわらず、希望を抱き、自己の能力を発揮して、当事者自らが選択した生活が営める主観的な構えや志向性の考え方である」²⁾と述べている。A氏は、症状が落ち着いた後、希望を持ち前向きに考えることができるようになった。

VI. 結 論

退院前訪問指導を行い、患者、家族の希望、思いを整理することは、自己決定の支援となり、地域の中での生活を維持できることにつながる。

文 献

1) 日本精神科看護協会監修：実践精神科看護テキスト 精神科訪問看護 12. 精神科看護出版, P54, 2007

2) マーク・レーガン, 前田ケイ：ビレッジから学ぶりカバリーへの道, 精神の病から立ち直ることを支援する. 東京：金剛出版, P24, 2007